

「かながわ人づくりコラボ2012」実施結果概要

平成24年11月10日（土）川崎市教育文化会館大会議室において、「かながわ人づくりコラボ2012」を開催しました。

中学生から大人の方まで、239名の方々にご参加いただき、ワークショップ及び教育論議において、活発な話し合いが行われました。その概要をご紹介します。

概 要

1 趣旨

かながわ教育ビジョンに基づき、「かながわ人づくりコラボ2012」を開催し、参加者同士の交流を図りながら、県民との教育論議等を通じて、様々な主体との協働・連携による人づくりの一層の推進を図る。

2 テーマ 「広げよう！豊かなつながり ～地域でのさまざまな活動を通じた人づくり～」

★ワークショップテーマ

テーマA 「コミュニティでの活動を通じた地域の教育力を考えよう」

テーマB 「スポーツ活動を通じた地域の教育力を考えよう」

テーマC 「文化芸術活動を通じた地域の教育力を考えよう」

★教育論議テーマ

「広げよう！豊かなつながり ～地域でのさまざまな活動を通じた人づくり～」

3 日時

平成24年11月10日（土）13時15分から16時30分

4 会場

川崎市教育文化会館（川崎駅から徒歩15分）

5 主催

神奈川県教育委員会 かながわ人づくり推進ネットワーク

6 共催

川崎市教育委員会

7 参加者数

239名

8 実施内容（司会進行 後藤 多喜 さん[県立川崎高等学校生]）

（1）あいさつ（かながわ人づくり推進ネットワーク 高木 展郎 幹事長）

「かながわ人づくりコラボ2012」にお越しいただき、ありがとうございます。

この「かながわ人づくりコラボ」は、平成19年に策定した、本県の教育推進の総合的な指針である「かながわ教育ビジョン」に基づき開催するものです。

教育ビジョンを策定する際は、県民との話し合いを大切にしてきましたが、教育ビジョンを推進する際も同様です。「かながわ人づくりコラボ」は、県民の皆さんとの論議の場であり、このような場で、今後の人づくりについて、しっかり議論することは、大変重要と考えております。

今回のテーマ「広げよう！豊かなつながり～地域のさまざまな活動を通じた人づくり」については、「かながわ教育ビジョン」の重点的な取り組みのⅧ「学びを通じた地域の教育力の向上」について皆様と一緒に考えてまいりたいというものです。



かながわ人づくり推進ネットワーク
高木 展郎 幹事長

人と人や地域での“つながり”を広げながら、地域での様々な学びや、スポーツ・文化芸術に関わる活動を通じて、コミュニティづくりを進め、地域の教育力を高めるために、どのようにしたらよいかを考えてまいります。

また、「つむぐ おりなす」協働により、地域の教育力を高めるためには、様々な地域の活動を通してどのようなことができるのかという視点で、論議を行いますので、御理解・御協力をよろしくお願いいたします。

かながわ教育ビジョンは、平成19年に策定されてから5年が経過し、そろそろ検証の時期となっております。このような視点も踏まえながら、皆様と議論を行い、今後、教育ビジョンの点検や検証に取り組んでまいりたいと考えております。

(2) ワークショップ

テーマA「コミュニティでの活動を通じた地域の教育力を考えよう」

テーマB「スポーツ活動を通じた地域の教育力を考えよう」

テーマC「文化芸術活動を通じた地域の教育力を考えよう」

上の3つのテーマごと（テーマAは3グループ、テーマB・Cは各1グループの全5グループ）にグループに分かれ、それぞれのテーマに沿った活動の事例発表を聞いた上で、少人数で話し合いました。

また、ワークショップに参加しない方は、自由に各グループの事例発表や話し合いを見学していただきました。

各グループでの事例発表及び話し合いの概要は次のとおりです。

ア テーマA事例発表 発表者：とどろき水辺の楽校代表幹事 鈴木 眞智子 さん

○ 初めて多摩川に関わったのは、2000年2月の桜植樹でした。

「良い子は多摩川であそばない！」という暗黙のおきてがあることを知り、その複雑な心境を周囲の人に伝えているうちに、行政担当者から「水辺の楽校」立ち上げに参加しないかという打診を受けたことが、現在まで12年間、年間参加延べ人数1,000人を超える「とどろき水辺の楽校」設立に至るあらしです。

○ 水辺の楽校は、「源流から河口・海までつなぐ」ことを目的として活動しています。開校事業「植物観察・ガサガサ体験・野草天ぷら」に始まり、春は河口での「干潟観察」、夏は多摩川源流山梨県小菅村での「溪流体験教室」、そして、秋から冬の横浜みなとみらいでの「夢わかめワークショップ」への参加など、文字どおり源流から河口・海までを縦横無尽に移動するのが主な活動です。

○ 参加者の付き添いで来たはずの保護者が夢中になって活動したり、一度参加した方が、活動の面白さにはまり、スタッフとなったりなど、参加者の家族を巻き込んだり、口コミにより面白さが広まるなど少しずつ参加者が増え、今では市内のみならず、神奈川県内及び東京都からも参加者が来るようになりました。

○ 参加した子どもたちが成長した時に、「多摩川は綺麗だった！楽しかった！」と語り継いでくれるよう、そして「自分の子どもたちにも体験させたい！」と思ってもらえるような次世代につながる活動にしていきたいです。



とどろき水辺の楽校
代表幹事 鈴木 眞智子さん

(ア) コミュニティ①グループ

【事例発表を聞き、考えたこと】

- 自分のできることは小さなことから始める。
- 地域外に住んでいる人や若い人など、入りにくいと感じている人を受け入れる体制を作る必要がある。
- 活動している団体を広く知ってもらふ必要がある。(町内会などの団体との連携)
- 実際に体験する機会を通して、川が安全であることを知ってもらっているところが良い。
- 自然の中で遊ぶことによって気付くことがあり、それが学びとなる。
- 部活動に多摩川での活動を取り入れて、活動を活発にしたい。
- 地域の清掃活動をもっと積極的に行っていきたい。
- 世代を超えたコミュニケーションが大切である。

【身の回りのコミュニティ活動について日頃感じていること】

- 地域の方々とのコミュニケーション(あいさつ等、お互いに声を掛け合うこと)は良いことである。
- 地域の清掃を通じて異世代間のコミュニケーションを図ることで、視野が広がる。
- 地域から見守ってもらっていると感じる。
- 子どもたちが地域に参画していくことが大切。



【まとめ】

- ◎ 地域活動を通して、地域の人同士が知り合い、あいさつがはじまり、地域のつながりやコミュニケーションが深まっていくことが理想的である。
- ◎ 活動に参加しやすいように、活動内容を知る機会(広報活動)や、話し合う場をたくさん作る必要がある。

(イ) コミュニティ②グループ

【事例発表を聞き、考えたこと】

- 地域の活動(特に子どもの活動)の場を増やす必要がある。
- 個人の経験を深めることが大切である。
- 世代を超えた交流が大切である。(子ども同士でも)
- 高校生や中学生が川で遊ぶことを経験し、下の年代へその経験を伝えることが、このような活動の継承につながるのではないかと。
- 小さなことから大きなことに広げていくことが大事である。
- 子どもたちに美化活動体験をしてもらうことが大切。そういう経験をした子どもは川などを汚さない。



【身の回りのコミュニティ活動について日頃感じていること】

- 学校の授業やクラブ活動に地域の大人たちを招くことが、交流を深めるきっかけとなるのではないかと。
- 小学校の時は、学校の活動で地域の人たちとふれあう機会があったが、中学校ではボランティアサークルなどの人しか機会がないので、中学校でも続けてほしい。
- 地域の教育力は確実に落ちている。地域の子どもの育てようという思いを持つ年齢層が薄くなっている。
- 自分の好きなものや興味のあることを通じたネットワークから地域での活動を広げ

ていくことも意義がある。

- 身近な大人(例えば学校の先生)がボランティアや地域活動をしている姿を見せれば、子ども(生徒)もそのような活動に興味を持つのではないか。

【まとめ】

- ◎ 大人と子どもが交流する場の設定・運営に、みんなの力を集中して投入することが大切である。
- ◎ 楽しく、魅力ある活動であることが必要である。

(ウ) コミュニティ③グループ

【事例発表を聞き、考えたこと】

- 子どもが興味を持てる内容でコミュニティ活動があると参加しやすい。
- 中学生には、なかなか地域に入っていく機会が見付けられないので、地域の大人たちが子どもたちを受け入れる姿勢を持つことが重要である。
- 子どもたちと川や地域との関わりが薄れている。
- 子どもだけ、大人だけではダメなので、共に「遊び」に入れると良い。
- 川などが汚いとそこでふれあえない。自然や環境をより良く保ち、活動を進めたい。



【身の回りのコミュニティ活動について日頃感じていること】

- 赤ちゃんや子どもの声を聞くことが少なくなった。
- 通学路の声掛けなども、子どもたちと関わるきっかけにしたい。
- 自然にふれあう喜びなどを、子どもと大人が一緒に分かち合っていきたい。
- TwitterやFacebook等を活用して、人とのつながりを深めることもできるのではないか。
- 子ども会の減少等もあるので、大人の側から工夫し、働き掛けていく必要がある。

【まとめ】

- ◎ コミュニティと関係する行政の役割。
- ◎ 若い(青少年)人たちに、大人たちがいかに働きかけるか。

イ テーマB事例発表 発表者：(株)川崎フロンターレ集客プロモーショングループ 井上 剛 さん



(株)川崎フロンターレ
集客プロモーショングループ 井上 剛さん

- 川崎フロンターレは川崎市をホームタウンとし、川崎市営等々力陸上競技場をホームグラウンドとする、サッカーJリーグのディヴィジョン1に所属するプロサッカーチームです。
- 川崎フロンターレは、地域に密着した市民クラブを作り上げ、スポーツの普及活動やプロサッカー事業によって、健康都市作り、地域の活性化・川崎市のイメージアップ等地域社会への貢献を目指しています。
- 市民がスポーツに日常的に関わることにより、スポーツというものが日常生活の一部になるような環境を作り上げ、川崎市に住む人たちが豊かな生活が送れるよう更なるスポーツの普及・振興を図っています。

- 具体的な地域活動（柔軟な発想でサッカーやスポーツに留まらない活動）として次のような取組を行っています。
 - ・ サッカーの普及活動（幼稚園・小学校でのサッカー教室の開催や中学校での部活動支援、フットサル施設の運営など）
 - ・ フロンターレの知名度を活用した活動（フロンターレ算数ドリルの作成・配布や読書推進事業（選手による読み聞かせ、地域人形劇団の協力による図書館のマナービデオの作成等）など）
- スポーツには、「する」「観る」だけでなくいろいろな分野があります。フロンターレとしてもそこに気付き、サッカーの枠を超えて地域に貢献していこうと考え、活動することにより、より多くの方に出会うことができました。
- スポーツに対する良いイメージを地域での活動に活用していくことにより、地域のイメージが大きく変わっていく可能性を秘めています。
- 自分たちの日頃の活動（スポーツに関係ない活動も含めた活動）が、地域でつながる手段になります。柔らかいアイデアで、スポーツを超えて考えてほしいです。

(ア) スポーツグループ

【事例発表を聞き、考えたこと】

- スポーツ団体と地域コミュニティは、Win-Winの関係（お互いに利点がある関係）が必要である。
- 活動を活発にするためには、施設環境の充実も必要である。
- スポーツ活動は教育に良い効果がある。
- 知名度のある選手のPRは効果があると感じた。
- 地域の課題を見付けるには、地域活動（コミュニケーション）が必要である。
- スポーツによる被災地支援活動は、素晴らしい活動である。



【身の回りのコミュニティ活動について日頃感じていること】

- スポーツ関係者を中心に、いじめ防止、環境問題への取組を進めている。
- スポーツ施設（設備・料金）の整備向上により、スポーツに参加する機会が増えるようになると良い。
- 学校施設を有効に活用できるようにすれば、学校周辺地域のコミュニティも活性化するのではないか。
- 団体の垣根を越えた活動ができると良い。
- スポーツを通じた異文化理解等の活動を進めてもらいたい。

【まとめ】

- ◎ 親しみやすいスポーツという切り口から教育活動へ参画していくこと。（Win-Winの関係）
- ◎ スポーツ施設の環境（ハード面）、学校等の公共施設の有効活用・整備を図る。

ウ テーマC事例発表 発表者：高津市民合唱団副団長 飯塚 宏 さん

- 高津市民合唱団は、川崎市高津区の音楽文化の振興と発展を目指し発足しました。また、区民音楽祭の開催にも協力しています。
- 川崎市合唱連盟は、川崎市内の「合唱団」の交流、向上を図り、コーラスの楽しさを広めるために発足し、川崎市と共催で、毎年川崎市民「第九」コンサートを開催しています。このコンサートは、平成24年で24回目を迎える「市民参加型」のコンサートで、毎年多くの市民が参加し、合唱を通して、交流を深めています。
- 一人の精神障害の方が「ベートーベンの第九を原語で歌いたい」とつぶやいたのがきっかけで、宮前区に住む音楽プロデューサーが中心になり「しあわせを呼ぶコンサート」を開催することになりました。このコンサートを通じて、一般市民と障害者が交流を図ることで、障害者に対する理解と協力を求める取組にもなっています。
- 合唱の素晴らしさはハーモニー(調和)です。人々が集まり、助け合いながら、自分勝手に歌うのではなく、みんなが声をそろえて、相手の声を聴きながら歌うことに良さがあります。



高津市民合唱団
副団長 飯塚 宏さん

(ア) 文化芸術グループ

【事例発表を聞き、考えたこと】

- みんなで協力するには、助け合いが必要。その助け合いの中で、自分の役割や自分のできることを発見することができる。そしてそんな自分を見付けさせてくれたみんなに感謝する気持ちが芽生え、心が豊かになるのではないかな。
- 活動を通して、人との出会いや関わりが生まれる。
- 合唱を通して、みんなが一つになって伝えようとしたことが、聴いている人に伝わっていく。
- 人と調和することにより、心が育つ。



【日頃の活動の中で苦労していること、困っていること】

- 頑張って取り組む中で、やる気のない人が出てくる。
- 授業や部活動などに追われて、コミュニティ活動に費やす時間がたりない。

【地域のために何ができるか(なぜ地域と関わらないといけないのか)】

- 非常時に地域で対応できるように、日頃の活動が大切である。
- 地域の人たちが何をしてほしいのか聞きたい。(してあげる側のエゴにならないように)
- つながりがほしい(特に家庭、学校、職場以外のつながりがほしい)ので、地域での活動が必要である。

【まとめ】

- ◎ 地域の人たちとの支え合いの一環として、ボランティア、ワークショップなどに積極的に参加し、その活動の中でのコミュニケーションを通して文化芸術活動を高める。
- ◎ 地域全体のみんなですべてのハーモニーを奏でる。

(3) 教育論議

「広げよう！豊かなつながり ～地域でのさまざまな活動を通じた人づくり～」

コーディネーター：かながわ人づくり推進ネットワーク 田代 正樹 副幹事長

パネリスト（登壇者）： 事例発表者の代表 鈴木 眞智子 さん

ファシリテーターの代表 菊地 正 さん

ワークショップ参加者の代表 野中 星 さん

神奈川県教育委員会 高橋 勝 委員

〃 倉橋 泰 委員

☆ 各グループのファシリテーターから、ワークショップの話合いの結果について報告があり、コーディネーターが次のように課題を整理しました。

- いろいろな世代の方が自然に関わり合い、活動が継続的に行われ、地域活動として定着していること、そのために自ら積極的に考え活動を進めることができる組織を作っていく必要がある。
- 地域で活動することの意義を、みんなが自覚して活動することが大切である。
- 活動内容をより多く地域の方に知ってもらうために何ができるか。
- たくさんの方が参加しやすい活動にするためには、どのような工夫が必要か。



☆ 各ワークショップの発表を聞いて、壇上のパネリストからは次のような意見や感想が述べられました。

- 楽しい活動であることが大事であり、自然にみんなが集まるのが大事である。そこに中学生、高校生、学校の先生、いろいろな人たち、高齢者も含めて寄り集まり、それぞれの視点から意見を言い合う。まとめるのは大変だがそれでよいと思う。
- 発表の中に答えはあったと思う。やはり、かながわ教育ビジョンの「たくましく生きる力」、「社会とかかわる力」をコミュニケーションするしかない。世代を超えて話せたことが大事だと思った。こういう機会をもっと増やしていくことが大切だと思う。
- ワークショップの話合いの中で、いろいろな立場の人たちの意見を聞くことができた。地域の関わりについて、それぞれの立場によって考えていることが違うということを学んだ。どのグループも(活動を)知る機会がない、やっぴがどうしたらいいのか分からないとのことだった。広報活動をしたりして、もっと関わる機会を持てたらと思う。
- スポーツはコミュニティづくりに役立つ分かりやすい種目である。現実には地域を見ると、少年野球、サッカー、高齢者の方々がグランドボールなどをやっている。この方たちが子どもたちに教え、支えていく。そして、この方たちの支えができてくるともっと地域が活気付く。組織づくりがこれから大事だと感じている。
- 水辺の楽校の活動は、最初、地元根付いた活動として、地域の学校にチラシを持っていた。川で活動するので楽しいだけでなく危険も伴うということを知り、安全管理を考えてレスキューの資格を取った。



10年前に参加した子が成長し、その子たちが広報活動をして、それを見た周りの人たちが参加している。チラシやホームページも作っているが、皆さんにはなかなか知られていないことが残念である。子ども会の活動が減り、参加者が少なくなっていることや、小学校高学年から高校生になると参加者が少なくなることなどもあるが、私は心配していない。興味があるところ、楽しいところ、地域に役立つ事は根付いてくれる。インターネットも大事だが、一番大事なのは口コミである。口コミをしてもらえるような温かい活動にしていきたいと思う。

- 高校生が発言していた意見だが、「小学生の頃は、地域の人が入り、けん玉や地域の伝統芸能を教えてくれたが、中学校に行ったらそのようなことがなくなってしまう」など、上に行くとは閉鎖的になってしまうのはどうしてなのか。以前だったら先生が学校以外で、部活動とかいろいろなところで人生の話をしてくれた。今それを先生には期待できない。ある意味、社会教育というか、大人になるための準備教育がなされていない。これはしっかり受け止めていくべきだと感じた。学校も大事だが、地域の輪がしっかりしていないと、高校生や中学生が大人になれなくなってしまうという危機感を感じた。

【意見メモからの紹介】

- 地域のつながりを深くしていくことが、教育づくりにつながっていくのではないかな。
- 世代を超えてのコミュニケーションが大切である。
- 他の人と交流することが怖い。(高校生)
- 他の学校との交流が余りない。(高校生)

【会場からの意見】

- 孫に触発され人づくりを始めた。孫が小学生の時に書いた習字の文字に触発され現代詩を書き応募したら佳作になった。また、孫が小学生の時のソフトボール部での活躍に触発され、囲碁の指導員の資格を取り、地元の子どもに教えている。

青少年の生きる力は、素晴らしいものがある。成人の生きる力は、小学生などに比べると、奔放すぎると感じる。小、中学校の義務教育またはそれを過ぎても、一生勉強するんだということが植え付けられると、社会勉強をしっかりして、立派な成人になるのではないかと感じる。

- 30年前、川崎で金属バット事件があり、横浜で浮浪者の殺人事件などもあり教育論議運動が起こった。人と人、人と自然との関わりや、年代を超え学校、地域、家庭で意見を出し合い子どもを救うことで神奈川の未来ができると、一生懸命やってきた。

20年間やってきて反省した点は、余りに真面目にやりすぎたこと。もっと楽しくみんなでやらなければ長続きしないと思った。そこで舞台やミュージカルを通して活動してきた。

教育運動というのは、いろいろな人たちが楽しい機会をたくさん作って、みんなが年齢、世代、男女を超えてやってみようとして参加することが大事である。

- 公立の中学校で非常勤をしているが、中学の美術の時間に神奈川の文化、伝統を題材にしたいと思っている。しかし、資料のある場所や誰に聞けばよいか分からず、実践に至っていない。そこで、いろいろ資料や技術を持った人の情報をまとめたり、そういう方々とながれるような場があるとよい。

- 「地域」が既に不確かではないかと思うのだが、「地域」とは何なのか。

→ 答えになるかどうか分からないが、私は肩肘張ってなくて、まず動くことから始めた。地域のためだとかではな



くて好きな人が集まり、気付いたら、地域どころか流域の人まで巻き込んでいた。一步進むことから広がるのではと思う。(パネリスト鈴木さん)

- 地域のことを考えるなら、町内会関係の方の出席があった方が良かったと思う。各地域に練習などに実際に活動できる場を作してほしい。

【コーディネーターによるまとめ】

- 世代を超えたコミュニケーションが大切であるが、子どもと大人をどうつないでいくかが課題である。
- 仲間との活動の中で、協調することを学ぶことができる。人と協調することの大切さは、地域での活動を通じて学ぶことができる。
- 昨年も出たことだが、あいさつが大事であり、声を掛けるきっかけになる。
- 何度も声掛けして、活動に参加してもらおう。その活動を通して人を理解し、更にいろいろな活動に参加する。人とつながることで勉強し、学びにつながっていく。
- 教育ビジョンは策定から5年が経つ。そろそろ見直しの時期に来ているが、前身のフォーラムやコラボでいただいた、皆さんの意見をもとに、リニューアル版ができると良い。



かながわ人づくり推進ネットワーク
田代 正樹 副幹事長

(4) まとめ (神奈川県教育委員会 宮崎 緑 委員)



神奈川県教育委員会
宮崎 緑 委員

本日はありがとうございました。素晴らしい議論が展開されたことと思います。

何か高い所にある物を取りたいと思うとどうするか。踏み台に乗ったり、肩車してもらったりします。その部分が教育だと思います。その踏み台はどんな在り方がいいのかということ、教育ビジョンで一生懸命考えてきました。今日の議論の中でも、ふれあい教育という言葉が出てきましたが、かつてのふれあい教育を引き継ぎながら、進化発展系で今回の教育ビジョンが、5年前に作られました。

このときに、私たちが心掛けたことが、まず県民総ぐるみで、一人ひとりが当事者としてどういう内容のものを練り上げていくか、作り上げる過程もワークショップをして、参加が難しかった企業、町内会の方などにも参加していただき、作り上げていきました。いわゆる偏差値的な学力ではなく、人間力、豊かな心、関係性をどうつむいでいくのかが見える形で作っていきたくて思いました。その作り上げたものが、それぞれの一生にわたって影響を与え、次の世代にも循環させ、一人だけで終わらずに、未来につながるような、そういう形のビジョンにしたいと、練り上げたのが今のビジョンです。精神はそういうことで作りましたが、精神だけではだめです。いかに具体化し、実践していくのか、それでこそ、初めて生きたビジョンになります。

しかし、形、やり方、質や量ともに一人ひとり、千差万別です。様々な側面があるので、生き生きと輝くように、細かいバージョンを時代に合わせて、変えていかなければいけません。精神の部分、神奈川県民である以上変わらない部分(不易流行)を大切にしつつ、時代や環境に合わせ柔軟に変化していくような教育を目指していくために、今日のような場が大切だと思います。コラボのような話をする場はそうつくれませんが、実は毎日がコミュニケーションの場でもあります。

今日のテーマのコミュニケーションは一人でもできます。自問自答もできます。柔軟に色々な場面でできると思います。24時間、そういうことをいつも頭の隅に置きながら、前へ進んでいく、それを確認する場として、今日の会は有効だったと思います。

こちらから拝見すると、制服の方もいらしています。次の世代に循環させていこうとする思いが、見える形で実現することは、大変うれしいことです。これからもこういう精神でつないでいくことができたらと思います。

今後とも一人一人ひとりが皆当事者ですので、力を合わせてかながわの教育について考えていきたいと思います。

本日は皆様ありがとうございました。

9 参加者の声

「かながわ人づくりコラボ2012」に参加された皆さんに、コラボで話し合った内容を踏まえて、これから「地域の教育力の向上」を目指して、自分なりに「取り組みそう」または「今後関わっていききたい」ということをアンケートで伺いました。

★積極的に地域の活動に参加する (全19件)

(主な意見)

- ・地域での話合い、ワークショップなどに進んで参加する。
- ・ボランティア活動、地域貢献活動に参加したい。
- ・地域のイベントに参加し、地域活性化に尽力していければと思う。
- ・自分でボランティアを立ち上げてみたいと思った。

★今やっている活動を広げる (全7件)

(主な意見)

- ・子ども会の活動で地域の方との関わりがあるが、その関わりを大切にしたい。
- ・今回の話合いを踏まえて、今後の生徒会活動に取り入れていこうと思った。

★異世代の人とのコミュニケーションを大切にする (全6件)

(主な意見)

- ・地域(近所)の人(大人、子ども関係なく)に積極的にあいさつする。
- ・様々な年代の方が共に学べる場、共に活動できる機会を創出していきたい。